悦楽のテーマパーク２

ナイトメア・アイランドの饗宴

体験版

作：@１０３９
イラスト：キリセ

■登場人物

小園内ミナ

特撮ヒロイン「ナイトラビット」を演じる清純派アイドル。身長１５６センチ。ストレートの胸まで届く長い黒髪で、ぱっちりとした愛らしい瞳が印象的。胸や尻の肉付きは薄いが、やせ過ぎてはおらず、女の子らしい丸みを帯びた身体をしている。６歳の頃からＣＭなどに出演し、ナイトラビットで一躍トップアイドルに。元気が取柄の天真爛漫な少女。

ナイトラビットではフリルスカートのついた黒いバニーコート、黒の長い兎耳、黒の手袋、首には黒い蝶ネクタイと白い襟、黒い編みタイツに膝上まである長いブーツというコスチュームを着ている。夜の街に現れる怪人をナイト・アローで撃つ、というのがパターン。

椎名フィオレッタ・ガルビエール

両親の影響で物心ついた頃からロックに目覚め、ゴスロリバンド Alice Switch を率いているハーフの美少女。身長１４０センチ。ゆるやかにウェーブする長いブロンド。背が低いのと巨乳がコンプレックス。年の割にクールな性格で涼やかな青い目と淡々とした話し方が特徴。お嬢様気質なため高飛車でトゲトゲしいが、馴れると甘えん坊なところもある。

バンドが有馬芸能事務所にスカウトされたことでナイトラビットの劇場版主題歌を歌う。映画にもシャイニングラビットとして出演し、ゴスロリ調の白いドレスをアレンジしたバニーコートに金色の兎耳をつける。

有馬拓海

真面目で仕事熱心で優しすぎるくらいの好青年。ナイトラビットの大ヒットのおかげなのか、有馬グループ総帥の父親の暗躍によってなのか、有馬芸能事務所の若き社長としてミナをプロデュースしていくことに。

念願だった音楽プロデューサーとしての手腕を発揮して、ゴスロリバンド Alice Switch をデビューさせる。

有馬峰雄

拓海の父。銀色に近い灰色の髪と野性的な髭面で、屈強な体躯と手腕の鋭さから「銀狼」と恐れらるリゾート開発の大手有馬グループの社長。闇の社会でも名の通った大物で、闇社会の黒い欲望を満たすテーマパークを作り上げる。現在消息不明。

高杉麻衣香

スリーサイズは９５・５７・８５。Ｇカップの巨乳を疎ましく思いながら、なぜかそれを強調するような服装をして周囲の視線を集めている。髪はショートカットでショートパンツにタンクトップとラフな服装。男勝りな性格で責任感が強い。姉御肌の強気な性格だが、男には消極的でうろたえてしまう。拓海の幼なじみで片想いでもあるのだが、一方でミナを妹のように想いながら、それを超えた感情も抱いている。帝都テレビのカメラマンからディレクターに昇格。ナイトラビットでも演出を任されたりしながらカメラマンもしている。

綾原鈴音

黒髪ボブカットに縁なしメガネをかけたスタイル抜群の美女だが、若くしてあらゆる科学に精通する天才であると同時に冷酷非情なマッドサイエンティスト。年齢不詳だが見た目は十代後半にも見える。有馬峰雄だけには絶対服従で数々の異常なアトラクションを作ったり、海外の研究所で生まれた奇形生物や実験生物を改良したりしている。

アンドレア・ガルビエール

フィオレッタの父であり、バンドのドラムを担当。ギターのファビオは弟。ベースの椎名アキラはフィオレッタの母の兄。

ナイトラビット

ミナが出演することになった特撮ヒロイン物のテレビ番組。父親が研究していた薬の力で、事故で死んだペットのウサギの力を手に入れた主人公、宇佐美ユイが、黒いバニー・スタイルで父親を誘拐した悪の組織と戦う。年上のホワイトラビットと協力して、キャプテン・ナイトメアを倒そうとしている。美少女アイドルが変身して愛らしいコスチュームで怪人と戦うということで大人気に。主人公を演じる小園内ミナは一躍アイドルスターになる。

■あらすじ

ドリームランドの地下に作られた悦楽のテーマパーク、ナイトメアランドでの狂おしい出来事から一年。特撮ヒロインとして、アイドルとして人気は上昇一方の小園内ミナ。遂にナイトラビット劇場版になることになり、その撮影も佳境に入っていた。

キャプテン・ナイトメアの牙城ナイトメアキャッスルがある孤島を舞台としたクライマックスシーンの撮影とプロモーションパーティー、そして主題歌のイメージビデオの撮影のため、ミナたち出演者とスタッフ、マスコミや主題歌を歌うゴスロリバンド Alice Switchを乗せた客船で絶海の無人島へ向かう。アリス・スウィッチのヴォーカルを務める小さな歌姫、フィオレッタは金髪碧眼のハーフの美少女。劇場版にシャイニングラビットとして特別出演もすることに。拓海や麻衣香には懐いていて、嫉妬も混じってミナにはやたら高圧的だったりもする。先行き不安になるもいつもながら前向きに頑張ろうと誓うミナ。

だが無人島のはずの孤島にはキャプテン・ナイトメアの後継者ペルソナを名乗る怪人の罠が待ち受けていた。

島の地下はナイトメアランドを作るための実験場だったのだが、今やナイトメア・アイランドとして第二の悦楽のテーマパークとなっている。船の中で消えた麻衣香を人質にしたキャプテン・ナイトメアの命令でナイトメア・アイランドに挑むミナとフィオレッタ。麻衣香の胎内には次々と実験生物の卵が植えつけられていく。その孵化を止めるにはテーマパークの最後のアトラクションをクリアしなければならない。

再び悦楽のテーマパークの門は開かれ、国民的アイドルとブロンドの歌姫は変態アトラクションの数々によって陵辱されていく。

■第2章　潜水艇に弄ばれるウサギたち！

「ま、また……あんなことやらせるつもり？　や、やるならミナだけだよ！　フィオレッタにはあんなこと絶対ダメなんだからっ!!」
　普段から自分を避けるようにしていて、更には今の映像でもう軽蔑されているかもしれないと思っても、それでも後輩を守れるのは自分しかいない。そう思って震えながらも二人の間に立ちはだかる。
「あらぁ健気なのね、ミナちゃん。でも、もちろんウサちゃんたちに選択の権利なんてないのよ」
　再び綾原博士が合図すると大画面の映像が切り替わって、どこかのホールの客席らしい映像が映る。まるでオペラ劇場のような古めかしい洋式の大ホール。その客席を埋め尽くす大観衆が囲むステージにはあの男が立っている。
「どうだね、さっきの映像は？　懐かしい思い出だろう、ナイトラビット」
「ナイトメア……ペルソナ？」
　キャプテン・ナイトメアに代わって新たなナイトメアランドを作ると宣言した仮面の男だ。やはりペルソナもあのテーマパークでの出来事を知っている。
「悦ぶがいい。もう一度、いや新たなるテーマパーク、ナイトメア・アイランドに招待してやるのだからな」
「ナイトメア・アイランド？　相変わらずそんなもの作ってんだ。やっぱり、あんたも変態

じゃん！　そんなことよりみんなは無事なの!?　拓ちゃんや麻衣香さんを返しなさいってばぁ！」
　気丈に振舞うミナ。そのドレスの裾をフィオレッタがそっと掴む。
「ミナ……何の話だ？　さっきのモニターに映ってたのは……ここは、いったい何のテーマパークなんだ？」
「ここは……さっき見たよね？　ミナは……本当はすごい恥ずかしい子なの……ナイトメアランドでいっぱいエッチなことされて……」
　強気を装っても透き通った青い瞳で見つめられると胸が苦しくなってくる。それを感じ取ったようにブロンドの少女はミナの手をぎゅっと握ってくる。
「ミナ……大丈夫だ……私はミナを信じるぞ……」
　いつもは素っ気ない態度を取られていたが、それは自分を嫌ってのことではなかったのだと今さら気づく。後輩とはいえ、彼女も負けん気の強さでミナに張り合っていたのだろう。小さくてもブロンド少女は自分よりもしっかりしているらしい。そう思うと負けず嫌いの黒髪の少女にも勇気が湧いてくる。
「こんなことして、もう絶対許さないからねっ！　今に痛い目みるんだからっ！」
「相変わらず気の強さだけは立派だな。もちろん他の客人たちも無事だ。私の後ろに座っているだろう」
　大ホールの客席に座っているのは船に乗っていた乗客たちだ。その手脚は拘束具で座席に固定されている。いや、拘束されずに悠々と座って酒を飲んでいる者もいる。
「彼らにはテーマパークのスポンサーやゲストになってもらわなければならない。そのために逃げずに、お前たちの姿を鑑賞して貰い、このテーマパークの素晴らしさを理解してもら

おうと思ってな。もちろん、前の客たちもいるぞ。お前が身体で知っている方々だ」
　客席には見知った映画界の重鎮たちも混ざっている。映画会社の人間たちも裏でペルソナと繋がっていたということだ。若い男もいるが、きっとネットで募集した一般客だろう。何が起きているのか分からない様子だが、そのうち欲情に満ちた目で憧れのアイドルの肢体を嘗め回すように見るだろう。捕らえられた撮影仲間と共に、ナイトメアランドの時と同じように何も知らずに集められたミナのファンの視線が、無垢な少女たちを辱めることになるのだ。
「そう、これこそがナイトメア・アイランドでのクライマックスシーンということだ。君たちの活躍はしっかり撮影させてもらうぞ」
　劇場版ナイトラビット自体がペルソナの仕組んだことだったというのだろうか。元々豪華客船はナイトメア・アイランドを目指していたのだろうし、覆面集団の乱入もペルソナによる演出でしかなかったということか。
「君たちの大事な連れももちろん丁重に扱っているよ。ただし、君らが命令に背いた場合はペナルティが課されることになるが」
　ペルソナが立つ大ホールのステージに大きな十字架が置かれている。透明な箱状の十字架ケースの中には、ホワイトラビットの衣装を着せられた麻衣香が閉じ込められている。
「ま、麻衣香さん！」
「麻衣香っ！」
　二人の美少女が同時に呼びかけるが、ケースの中で十字に張りつけられた巨乳美女はぐったりしたまま動かない。
「眠っているだけだ、心配はない。ただ、君らがのんびりしていると、このケースの中にロ

ーズ自慢の実験生物が入っていくことになる」
「じ、実験生物って……」
「麻衣香に何をするつもりだ、露出女！」
クスクスと微笑むボンテージ美女。彼女の手には大きなペンのようなスイッチが握られている。
「アタシが培養した改造生物なんだけど、なぜか幼虫を女性の胎内に侵入させて蛹にしないと成体として孵化できないみたいなのよぉ。アタシとしては是非、成体を拝んでみたいんだけど、自分の身体で試すわけにもいかないじゃない？　だから、ご主人様にモルモットを提供してもらったの、うふふ」
「ま、麻衣香さんはモルモットじゃないよっ！」
「麻衣香にヒドイことすると許さんぞっ！」
少女たちに責められても、もちろん綾原はびくともしない。むしろ、何も出来ない無力なアイドルたちが吠えているのが愉快でしょうがないらしい。
「あっはははは！　たかがアイドルや歌手がアタシに何ができるのかしら？　スイッチ一つであなたたちをサメのいる海底に落とすことだってできるのよぉ」
少女たちが思わず青ざめて足元を見る。暗くて見えないが、何か大きな影が揺らめいたようにも見える。
「自分たちの無力さが分かったら、自分の命とお友だちのためにさっさと着替えなさい」
再び指し示されて、いやらしく改造されたバニーコートを見る二人。ミナは意を決してツカツカと黒いナイトラビットの衣装に歩み寄り、ハンガーを降ろす。
「ミナ……」

自分より小さい少女の青い涼やかな瞳が今まで見せたことのない不安の色を湛えている。
「……フィオレッタ、ごめん。今はこうするしかないけど、麻衣香さんのために二人でがんばろっ！　フィオレッタのことはミナが守るから！」
気休めでしかないのは、もちろんフィオレッタも気づいているだろう。それでもブロンドのゴスロリ少女は普段は避けていたミナに力強い笑顔で頷く。
「ふん、ミナに守られるほど私は弱くはないぞっ！」
そして、自分もシャイニングラビットのバニーコートを手に取る。
「さあ、みなさんお待ちかねよ。観客のみなさんにサービスしながら着替えて頂戴ねぇ」
「な、なんで！？　やだよ、こんなとこ見せないで！」
「そうだ！　私たちはレディだぞ！　下品な男どもなどに肌を晒せるものか！」
「やぁねぇ、これからもっといやらしいことされるのに変な子たち」
笑いながら綾原が取り出したスイッチを押す。
「え、ちょっと、それって！！」
ミナが思わず目を見開く。十字架ケースに囚われている麻衣香を映し出していたモニターを見ると、十字の横棒部分の両端が開き、連結されたパイプから実験生物の幼虫が次々と侵入していく。小さなナマコのような生物がしなやかな細指に触れると、ぴくっと麻衣香が反応する。
「……う、んぅ……あれ、ここ……え？　な、うわ、何だこれっ！！」
狭い箱の中で思うように動けない上に、状況も分からない、その上、指先から迫ってくる奇怪な生物にホワイトラビットの衣装を着せられた巨乳美女が完全にパニックを起こす。ガチャガチャと拘束具の金具が音を立てているが、十字架ケースは地面にしっかりと固定され

ている上に恐ろしく頑丈にできているらしく、ビクともしない。
「さあ、見ている場合じゃないわよ。すぐにアタシのかわいい子供たちはホワイトラビットの恥ずかしい下のお口を見つけて、女の一番大切な部分に入っていくわ。そして子宮に侵入して蛹になって、お腹の中で孵化するのよ。そしたらどんな子供が産まれてくるのかしらぁ？想像するだけでワクワクするでしょぉ？」
「す、するわけないよっ！　き、着替えるから、あの虫を止めてってばっ！」
幼虫は白い長手袋を着けた腕を這って、どんどん進んでいく。ボトボトと足元に落ちたら、今度はスラリと伸びる美脚に粘液を塗りたくりながら這い登っていくに違いない。
「残念だけど、もう手遅れよ。ホワイトラビットを助けたいなら、ナイトメア・アイランドのアトラクションをクリアして、あの十字架に辿り着くしかないのよ。そしたら孵化を止める薬をあげるわ」
「そ、そんなぁ……」
困惑と焦燥、そして怒りが少女の小さな胸の中で渦巻き、思わずバニーコートを握り締めたまま動きが止まってしまう。
「ミナ……ミナ！　これ、着るの手伝え！」
「ふぇ？　フィ、フィオレッタ！」
背中を突かれて気づくとブロンドの少女が裸になってミナにシャイニングラビットの衣装を押し付けてくる。肌を晒すのに抵抗がないわけではない。現に小さな愛らしい顔を紅潮させ、ほっそりとした雪白の四肢も熱を帯びたように桜色に染まっている。抱き締めれば折れそうなほどの可憐で小さな身体と不釣合いなほどの美しい形と大きさを誇る美巨乳が羞恥と屈辱で震えている。無垢な容姿と不似合いな巨乳にコンプレックスを持っていて、更に気位

が高いだけにブロンド歌姫の屈辱感は一層強いに違いない。
「モタモタ着替えていれば、あの下品な男どもを悦ばせるだけだ。早く着替えて麻衣香を助けに行くぞ！」
「……フィオレッタ……う、うん！」
シャイニングラビットの衣装は、元々は肩が露になるワンピース状の白いレオタードに腰元を覆うように赤いチェック柄のフリルが重なっているゴスロリ調のスカートがついていて、背中部分に同じように赤いチェック柄の大きなリボンがついているのが羽のようにも見える。首元はバニーガールっぽく襟が着いていて、赤チェックのネクタイも装着する。そして衣装全体を金色の縁取りが彩り、ゴスロリ風のフリルやレースがあしらわれている。
だが、ペルソナが用意した衣装は、極小のビキニのような部分を透けるほど薄い生地でワンピース状に繋げているだけで、スカートも股布が見えるほどのミニ丈になっている。こんなのを着れば、身体のラインどころか素肌まで透けて見えてしまいかねない。
（こんなの着るの、フィオレッタだって絶対恥ずかしいはずなのに、麻衣香さんのために頑張ってくれてる。ミナもボーっとしてる場合じゃないよね！）
早く肌を隠してあげようと裸のフィオレッタにバニーコートを着せて、背中の大きなリボンを結んであげる。長手袋と太腿までのニーソックス、厚底のパンプスを履くと、ウサ耳を着けた金髪碧眼の少女が淫猥さを強調されたゴスロリヒロイン、シャイニングラビットに変身する。
だが、薄手の生地からマシュマロのような肌が透けて見えそうで、胸の大きさが強調されるように押し出され、谷間が露になっている。ほっそりとした四肢もゴスロリ衣装の豪奢な装飾からでもはっきりと露出するようになっていて、あどけなさと色香の混ざった妖艶さが

醸しだされている。
「フィオレッタが頑張ったんだもん。ミナだって着替えを見られるくらい平気だよ」
もちろん平気ではないのだが、シャイニングラビットになった少女に頷くとドレスを脱ぎ捨て、下着も取り去る。柔らかく膨らみ始めた微乳の上の桜色をした乳頭やほとんど無毛の恥丘が岩窟の冷気と衆目に晒されるとさすがに身体が火照ったように朱に染まる。だがモジモジしていたら余計に羞恥の時間が伸びるだけと思い、改造されたナイトラビットのバニーコートを身に着けていく。
ミナの衣装も映画用に豪華に作り直されていたが、それもペルソナによって改造されていては、屈辱的な衣装でしかない。しかも、フィオレッタに着せている時には気づかなかったが、自分で着てみると所々キュッと身体を締め付けてくる。
（これって、まるで……）
思わず綾原が着ているボンテージ衣装を見てしまう。
「あら、気づいたみたいねぇ。その衣装、拘束具を組み込んであるのよ。着ているうちに段々締め付けられて、ご主人様に縛られているみたいに感じるわよ」
「ミナたちにご主人様なんていないよ！　なんで、こんな服……」
「あら、生意気なウサちゃんたちをしつけるために決まってるじゃない。もちろん、ご主人はペルソナ様。そのうち拘束されて支配されてる感じがたまんなくなるわよぉ。で、仕上げにこれを着ければ完成よ」
着替え終わった二人に近づいてきた綾原がガチャリと大きな音を立てて首輪を嵌めていく。黒革に鋲が打たれた大きな首輪。
（こんなの……まるで奴隷みたいだよぉ……）

屈辱に震えながらブロンドの少女を見ると、さすがに気位が高いだけに恥ずかしさと怒りで顔を真っ赤にしている。
「わ、私にこんなことをしてタダで済むと思うなよ！　必ず後悔させてやるぞ！」
「あらあら、ナイトラビットに似て生意気な子ウサギちゃんねぇ。いつまでそんな態度でいられるか楽しみだわぁ」
白衣の女博士がいやらしい笑みを浮かべる。
「ミナたちは逃げも隠れもしないのに、何でこんな首輪が必要なの！？」
「うふふ、それただの首輪じゃないのよぉ。中にマイクが仕込んであって、あなたたちのかわいい鳴き声がお客様たちによぉく聴こえるようにしてあるの」
鳴き声と言われると、思わず恥ずかしさで頬が赤くなってしまう。
「後は、あなたたちがご主人様のペットだって自覚してもらうためね」
「ご、ご主人様って……誰があんなやつ！　って、あうぅっ！」
モニターに映されるペルソナを指差した瞬間、二人の美少女は床に這いつくばってしまう。
「ダメよぉ、ご主人様にそんな口を聞いちゃ。アタシがしっかり調教してあげるわね」
劇中でもローズは鎖を武器に使っていた。首輪にはその鎖が付けられていて、彼女の鎖捌きで二人は動物のように四つん這いにさせられたのだ。
「さあ、おいでウサちゃんたち。早く最初のアトラクションをクリアするのよ」
「うあ、や、やめろぉ！」
「引っ張んないでってばぁっ！」
鎖を引かれ、四つん這いのまま歩かされる。隷従を強いられる屈辱に思わず怒りの言葉を発するが、抵抗しようにも思うように立つこともできない。そのままドーム状の岩窟を連れ

出され、細い海底トンネルをウサギのように歩かされていく。
　トンネルの壁にも常にモニターが配置されていて、美少女二人がお尻を出して歩かされる様が大写しにされ、興奮した客の声が聞こえてくる。
『うほぉ！　見ろよ、縦筋がくっきり浮かんでるぞ！』
『股布細いから、ズレてくんないかなぁ。俺、肛門拝みたいんだよ』
「な、何、この声？」
　まるで耳元で囁かれてるみたいで、二人の羞恥心が一層煽られる。
「うふふ、首輪に仕込んだのはマイクだけじゃないのよ。高性能のスピーカーが付いてて、まるで直接囁かれてるみたいにお客様の声がウサちゃんたちに届くようにしてあるのよ」
「ふん！　下品な大人ばかりだな、ミナ」
　フィオレッタは強気な言葉を放つが、その顔はやはり羞恥で真っ赤に染まっている。外見があどけないとはいえ、良家の令嬢として育てられている。こんな辱めを受けて平気でいられる子ではないのだ。
「だめよぉ、ミナなんて呼んじゃ。変身したあなたたちはナイトラビットとシャイニングラビットでしょぉ？　女優のはしくれなら演技もちゃんとしないとぉ」
　グイグイと鎖を引かれて思わず床に突っ伏してしまう二人の特撮アイドル。
「シャ、シャイラビ……役になりきれば、悪いヤツラに負けない気持ちになれるよ！　どんなヒドイことされても、絶対あきらめないって！」
　映画の中では異世界からやってきた王女という設定のシャイニングラビットは、ナイトラビットにシャイラビと呼ばれている。それに合わせてミナもナイトラビットとしてフィオレッタのことをそう呼ぶ。

「ミ……ナイトラビット……そ、そんなことしなくても私は強いから大丈夫だ、愚か者め！」
態度と裏腹に不安げな表情が消えて、高貴な変身プリンセスであるシャイニングラビットらしい威厳を放つフィオレッタ。
二人は首輪から聴こえてくる辱めの言葉に耐えながら、必死で引っ張られるままに四つん這いで海底トンネルをウサギのように走る。
「うっふふふ、まぁあなたたちはこれからもっと情けない姿を晒すことになるのよ。ほら、最初のアトラクションに到着よぉ」
到着したのはトンネルを抜けた第二の岩窟。というよりは本来はここが最初の入り口なのだろう。天井が抜けていて、地上に続く螺旋階段があり、床はコンクリートで整地されている。その床の一部がくり貫かれ、鉄柵に囲まれたプールのようになっていて、乗り物乗り場が設置されている。岩窟の壁にはやはり巨大なモニターがあって、観客が映し出されている。どうやら、どこに行っても観衆に見られているのを意識せざるを得ないようにしているようだ。
（前は麻衣香さんに撮られてたけど……ここはどこにでもモニターがあって、カメラがしかけられて……いつでもどこからでも見られてるんだ……）
見られているという意識が、かつて国民的アイドルの青い果実のような身体から無理矢理引き出された被虐の悦びをミナ自身が気づかぬうちに再び掘り起こしていく。
「さ、まずは二人にパンフレットをあげるわね。色んなアトラクションの説明も載ってるから、ちゃんと読んで楽しんでちょうだい、うふふ」
アトラクション。ミナはともかくフィオレッタにとっては初めてのナイトメア・アイランドでのアトラクション。今まで連れて行ってもらっていたテーマパークでは楽しいものばか

りだったはず。
「なんだ、これは？　こ、こんなことを私たちにやらせようというのか!?　こんな……へ、変態どもめっ！」
　白衣のドクター・ローズから手渡されたパンフレットを見る内に恐怖というより軽蔑と屈辱の混ざった怒りが込み上げてくる。
「うふふ。やぁねぇ、真っ赤になっちゃってかわいいわぁ！　でも、説明が分かるってことはシャイニングラビットちゃんも意外とませてるのねぇ？」
「ませてない！　私は……こ、子供じゃないぞ！」
「あら、じゃあ、このグラス・サブマリンがどういうものか、大人のシャイラビちゃんから観客のみなさんに説明してさしあげて」
　ジャラリと鎖が鳴り、備え付けの大画面モニターの前に引き出される金色兎のブロンド少女。
「せ、説明……だと？　こ、こんな不埒な物を!?」
「あらぁ、無理しなくていいのよぉ。あなたよりも優秀な大人のナイトラビットちゃんにお願いするから」
　そう言われると思わずぐっと歯噛みして大画面の観衆に向き直るブロンド少女。
（ミ、ミナの方が子供だ！　年下で背が小さいからってバカにするなっ！）
　気位の高さゆえ、先輩とはいえミナに辱めを受けさせるわけにはいかないと思ってしまう。見た目の子供っぽさがコンプレックスなだけに、その思いは一層強い。
「グ、グラス・サブマリンは、ナイトメア・ペルソナの秘密の居城があるナイトメア・アイランドへの侵入者を阻む海底ゲートだ……」

「そうね、どうやって阻むのかしら？」
愉悦の笑みを浮かべる赤いボンテージ美女を睨む小さな歌姫。彼女の美しい声が恥ずかしい説明をするのが楽しくて仕方ないのだろう。
「侵入者が使うのはガラスの球体型潜水艇。だが、球体からはすぐに酸素が失われていく。迷路のような水底トンネルを抜けて無事にナイトメア・アイランド内部に辿り着くためには、球体内部にある酸素吸入器から酸素を吸いださなければならない。なお……酸素吸入器は男性の……ぺ、ペニスの形状をしていて……酸素を出させるには……フェ、フェラチオの要領で……舐めしゃぶり、口いっぱいに頬張って刺激しなければならない……」
ぐっとパンフレットを握り締めて顔を真っ赤にして俯くシャイニングラビット。よくできましたと拍手するローズにも腹が立つが、首輪のスピーカーからも屈辱的な賛美が聞こえてくるのだ。
『あの美しい声で淫語を唱えられると堪りませんなぁ』
『ペニスとかフェラの発音が上手いってのがさすがだよね』
『生唾飲みながら読んでたぜ。実は結構得意なのかもな』
（か、勝手なことを言うな！　私は……そんな破廉恥なこと……全くやったことも考えたこともないんだからな！）
怒りに任せてズンズンと歩を進め、ナイトラビットの手を取ると乗り場まで引っ張っていく。
「お、落ち着いてよ、フィオレッタ。怒ってもあいつらの思い通りになっちゃうだけだよ！」
「フィオレッタと呼ぶな！　フィオレッタはあんないやらしい言葉を発したりしない！」
前のテーマパークで無数の男と交わいながら、卑猥な言葉を発し続けた黒髪の少女の胸が

ズキンと痛む。汚されつくした自分と違って、金髪碧眼の妖精はずっと清純なのだ。
（でも……このままじゃ、フィオレッタもミナみたいに汚されちゃうんだよ……）
乗り場のゲートを潜ると二人の前に桟橋に横付けされたガラスの球体型潜水艇が現れる。潜水艇の上部にはレールがあって、水中に続くそのレールに沿って進んでいくのだろう。球体のサイド部分に乗り口らしいハッチが付いている。
「さあ、早くアトラクションを動かせ！　麻衣香を助けないといけないんだから！」
ズカズカと桟橋を歩いていくフィオレッタに、鎖を持った綾原も引っ張られてしまう。
「もぉ……せっかちねぇ。そんなに怒っちゃ妖精みたいな顔が台無しよ」
狭い潜水艇の中に潜り込む二人。中には二人がけのベンチがあって小柄な美少女二人が座っただけでギュウギュウで立つこともできない狭さだ。骨組み以外はベンチも透明なガラス製で、中からも周りの全景が見えるようになっている。
（ってことは、向こうもミナたちをどっからでも見れるってことかぁ……）
ふと意識すると薄い股布が冷たいベンチに触れている感触がある。予想通り首輪から聴こえる下品な声が、少女たちの小さな肉唇が押し付けられている様を実況中継してくる。かといって体勢を変えることもできず、甘んじて淫猥に歪む秘所を晒し続けるしかない。
「絶対、このクズ大人たちには私に対して二度と浅ましいことを考えられないようにしてやるっ！」
二人が座ったのを確認すると、ローズが首輪から鎖を外して潜水艇のハッチを閉める。
「じゃ、行ってらっしゃい。楽しんでちょうだいね！」
楽しめるわけがない。不安と怒りの混ざった表情の二人を乗せて、ガラスの球体がガクンと揺れて動き出す。ズブズブと昏い水底に沈んでいくとさすがに怖くなるが、すぐに球体の

内部の照明が灯り、外側のサーチライトがくるくると動いて水底トンネルを照らし出す。色とりどりの魚や海草が揺れ動くのが見えるのも、こんな状況でなければ楽しいはずなのだが。
「って、このままぼーっとしてたらヤバイんじゃ……」
ミナが呟いた瞬間、天井に付いた赤いランプが瞬き、正面にあった液晶モニターに酸素漏れの警告が表示される。しかも本当になんだか息苦しくなって呼吸が荒くなってくる。
「ホントに酸素が薄くなってるぞ。狂気の沙汰だな……。で、酸素吸入器はどこにあるんだ？見当たらんぞ？」
「えぇ!?　っと……こ、これ……かな？　うぅ、これっぽいよ、フィオ……シャイラビ……」
狭い球体内のどこにもそれらしいものが見当たらないと思ったら、二人の足元に一本ずつ悪趣味な玩具のような模擬男根が屹立している。透明なゴムで酸素供給用のチューブが覆われていて、見た目は長大な巨根にしか見えない。
「もうフィオレッタでもフィオでも何でもいい。で、これを……す、吸えばいいのか？」
「う……た、たぶん、吸うだけじゃ……ダメなんだよ……さっき読んでたみたいに、しないと……」
モジモジと言うミナに絶望的な視線を向けるブロンド少女。
「そんな……わ、私……やったことないぞ、そんなはしたない……ミ、ミナは……あるのか？」
顔を真っ赤にしてオズオズと頷く国民的アイドル。
「まさか拓海と？」
一瞬止まってから、フルフルと首を振って否定する。
「も、もっと……たくさん、知らない人のを……ミナは……ミナはいっぱい……」
いつもは太陽みたいに明るい少女に思いもよらない暗い過去があったことに驚いたフィオ

レッタだが、すぐにぐっと先輩アイドルの手を握り締める。
「ミナじゃない……ナイトラビットだろ？　みんなのために戦うヒロインなんだから、負けちゃダメだ。麻衣香を助けて、ホワイトラビットと三人であのペルソナって奴を蹴っ飛ばすぞ！」
　見た目は子供でもしっかりとした少女は、自らも不安に押し潰されそうなのに黒髪の少女を抱き締めて励ます。
「と、とにかく！　やるしかないんだぞ！　ナイトラビットは先輩なんだから、どうすればいいのか教えなきゃだぞ！」
「な、なんか、こういうので先輩って恥ずかしいんだけど……って、これ、こんな位置にあるの、どうしよ……」
　身動きすら取りづらい狭さで、模擬男根は足元に設置されている。それを咥えるにはベンチに膝をついて、尻を突き上げるような格好で床に這いつくばるような屈辱的な姿勢を取るしかない。渋々二人ともアイドルとは思えない姿勢を取り、床の模擬男根に可憐な手を添える。
『ふへへへっ、かわいいお尻が丸見えだよぉ』
『うはぁ、俺のミナちゃんがこんなエロいポーズするなんて……』
『金髪の子の方、なんか透けて見えてんだけど』
　またしても首輪のスピーカーから卑猥な男たちの言葉が聞こえてくる。思わず足を閉じてみるが、そんなことをしても突き出した尻は隠しようもない。フィオレッタの方は、胸が床に当たって柔らかそうに押し潰されている様が更に男たちを昂揚させている。そして目の前にはおぞましい形で揺れる模造男根。

「フィ、シャイラビ……まず、舌で根元から上までゆっくり舐めてみて……この、う、裏筋っていうとこを……こんな風に……」
　恥ずかしそうに言うと、黒髪の先輩アイドルが小さな舌を伸ばし、ゆっくりと舐めあげていく。亀頭の付け根をチロチロと愛らしい舌で愛撫すると、確かに男根の先から酸素が出てくる。だが、その舌捌きを横目で観察しているフィオレッタには、黒髪少女の清純さとは裏腹な淫らさの方が気になってしまう。
「……ミナ……す、すごくエッチだぞ……そんな風にしないと、ダメなのか？」
「エ、エッチって……だって、こうしないと……」
「わ、わかったわかった……こ、こうだな？」
　長い緩やかにウェーブしている金髪をかき上げると、その豊乳がなければ初心な少女にしか見えないハーフの歌姫が、歌声で鍛えたのか意外に長い舌を出し、ゆっくりと男根の裏筋を舐め上げていく。
（これ、昔見たパパのと違う……男のって、エッチな時はこんな風になるのか？　それで、私たち女はこんないやらしいことさせられるっていうのか？）
　大人の男に囲まれてライブツアーをしてきた少女でも、男性とのことには疎い。多少の知識があるだけで、フェラチオが実際どんなものかもよくわかっていなかった。気位の高い彼女にとって、男の下に跪いて召し使いか何かのように男に奉仕する行為は受け入れがたい屈辱でしかない。
「こ、今度は……この膨らんでるとこ……き、亀頭って言うらしいんだけど……それを舐めたり、口に含んで……飴みたいに舌で転がすの……」
「ナイトラビット……これって、おしっこするとこじゃないのか？　なんで私たち女がこん

なこと……」
「わ、わかんないよぉ。こうやって男の人を気持ちよくさせないと……」
「それじゃまるで私たちが奴隷みたいじゃないかっ!?　なんで、こんな……」
ミナに文句を言っても仕方がないのは分かっているが、性に疎いハーフ少女にとって、ペニスは性器よりも排泄器官としての認識が強いらしい。だが、彼女たちの耳にまたも野卑な言葉が届く。
『なんでって、チンポがおっきくなった方がミナちゃん嬉しいからだろ？』
『ああ、あんな美少女に気持ちよくさせて貰いたいなぁ……』
『そしたら、お返しにあのおチビちゃんにパイズリさせながら、でっかくなったポコチンの良さを教えてあげてぇなぁ！』
説明したミナが顔を真っ赤にして恥ずかしさで頭をクラクラさせてしまう。フィオレッタの方は更なる怒りに肩を震わせる。
「誰が、こんなクズどもに下僕のように奉仕するものか！　これは、酸素のためにやるだけだ！」
……ちゅぷ、ちゅぱ。
意を決したハーフ少女が模造ペニスの先端をふっくらした唇で包み込み、舌で亀頭を舐め回す。酸素が先端から漏れ出し、思わず鼻息を漏らしてしまう。
『もう喘ぎ始めてんじゃないか？』
『どうせなら俺のチンポをマイクにして喘いで欲しいなぁ……』
（くっ……こいつら、聞こえよがしに……）
ふと横を見るとミナが黒髪をかき上げながら根元から先端までねっとりと舌を這わせてい

る。自分より年上とはいえ、まだまだ少女の域を出ていないアイドルのあまりにも淫らな舌使いに同性で性に疎いフィオレッタでもドキリとしてしまう。
（わ、私も……あんな風に見えるのか？）
そう思いながら、横目で観察しつつ見よう見真似で舌を這わせ、野太い幹に唇を被せてはチュッチュッと音を立てて吸い、舌で巻き込むようにしながら先端からぐぶぐぶと喉奥まで飲み込んでいく。
（こ、これが……もし本当に男のモノだったら……ミナは、そう思いながらやっているのか？男がどう反応するかも知っているんだろうな……）
ジュブジュブといやらしい音が狭い室内に響き、美少女たちが粗い吐息を放つくぐもった声が更に男たちを煽っていく。
『へっへっへっ、ほらやっぱり。ミナちゃん、ちょっと濡れてきてるよ』
『うわぁ、ショック。さっきの映像、本物だったんだな。すげぇ乱れてたもん』
『私は前にも経験しているよ。そりゃあ見事な舌使いで自分から食いついてきたよ』
ビクンとミナの肩が揺れ、横目で自分のフェラチオを観察しているフィオレッタに複雑な視線を投げかける。スピーカーからかつてミナの身体を貪り、ミナ自身も乱れて身体を絡ませていった男たちの会話が聞こえてくるのだ。
（こんな……ミナがエッチなことしたの……フィオレッタに聞かれたら……今度こそホントに嫌われちゃうよぉ……）
ブロンドの少女が唾棄すべき存在と見下す下郎たちにミナは次々と抱かれ、愛すべき男とするはずの行為を肉欲のためだけに繰り返した。そう思いながらも、ニセモノのペニスを舐めしゃぶるフィオレッタの中では、今まで味わったことのない微熱の小波が起き始めている。

横目に見える黒髪アイドルのフェラチオ姿とスピーカーから聞こえてくる男たちによる少女の身体の感想が混ざり合い、ハーフ少女の中で思い描いたこともなかった肉欲にまみれる少女の姿が描かれていく。そして、自分でフェラチオをしながら、その姿を自分に置き換えてしまう。

（純粋無垢な顔をして、ミナはこれを何本も咥えて、恥ずかしいとこに入れられて……こんなに大きくなったのが、アソコに入ってきたら……）

じゅくん……。

『おい、見ろよ……』

『くっくっくっ、やっぱ白い衣装だと目立つよなぁ』

会話が示しているのが自分だと気づき、自分の身体の変化にぎょっとするフィオレッタ。赤チェックのフリルスカートから覗く白金の衣装の股間がわずかに濡れているのだ。

「こ、これは……ちが……うあぁ！」

急に潜水艇がガクンと揺れ、酸素吸入器を咥えていた二人も思わず転げまわってしまう。球体がグルグルと周り、逆さまになって止まると、美少女たちが身体を絡ませ抱き合っている。

「な、何、何なのよぉ！」

「ちょ、ミナ……お尻おしつけるな……」

気がつけば二人は上下逆さまになっていて、ミナのお尻にフィオレッタの小さな顔が押し付けられている。柔らかな豊乳がナイトラビットの衣装にむっちりと押し当てられてひしゃげてしまっている感触がお腹を伝って伝わってくる。

「や、やだ、フィオレッタ！　ご、ごめぇん！！」

泣きたいほど恥ずかしい思いで腰を浮かせる。自分の股布が濡れているのを気づかれたかもしれない。ミナの衣装は黒いので見た目には分かりにくいのだが、もう自分では抑えられないほど濡れてきているのを少女は知っているのだ。
（やだもぉ！　頭の中、あの時のオ、オチンチンでいっぱいで……やっぱミナの身体ってエッチになっちゃってるよぉ……で、でもでも……）
フィオレッタも白人特有の白い肌を真っ赤に染めてそそくさとミナから身体を離す。まるでおしっこを少し漏らしたみたいな感触が薄手の水着みたいな衣装に染み付いている気がしているからだ。現にうっすらと股布には染みが広がり始めている。
「ご、ごめんね、シャイラビ……って、早く酸素吸わないと！」
今度は頭上に来ている模造男根に二人の特撮アイドルがモゾモゾと身体を動かしてしゃぶりついていく。順調に吹き出ていた酸素が止まっていて、再び丁寧に舌での愛撫を余儀なくされる。
（あれ？　これ、さっきと位置が違う……）
先に気づいたミナが視線を横に向けるが、フィオレッタは素知らぬ顔で大きな亀頭にかぶりついていく。
（位置が入れ替わっている……ということは、これは……ミナの唾液……いっぱい絡んでて……熱くなってる……）
ジュブジュブと音を立てて吸い付くと、酸素と一緒に鈴口に染み込んでいたミナの唾液が口内に入ってくる。
（ミナの唾液……甘くて……ちょっとトロっとしてる？）
同性の唾液を思わず舌の上で転がして味わってしまう。吐き出すこともせずに飲み込んで

からふと隣を見ると、天井から延びる男根から滴ってくる唾液を舌で受け止めていたミナと視線が絡み合う。

◆続きは本編で愉しんでください！

Copyright(c) 2009 @039 All rights reserved.
この作品における内容全部について、無断複写・複製・転載はお断りいたします。
URL：http://1039run.blog90.fc2.com/